

放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センターだより

日々の暮らしを身近で支える

富岡町食品検査所

斉藤 秀樹 様



平成 31 年 1 月に富岡町役場の敷地内に富岡町食品検査所（以下、食品検査所）が設置されました。食品検査所では、自家消費野菜等に含まれる福島第一原子力発電所事故由来の放射性物質濃度の測定や、町民の方の放射線に関する疑問や不安を解消し、安心して町で暮らすことができるよう、相談対応を行っています。

—食品検査所では、どのような活動や取組をされていますか。

町民の皆さんが持参された野菜や果物等の食品をはじめ、畑や田んぼの土壌、井戸水やため池の水などに含まれる放射性セシウム濃度の測定を行っています。また、町民自身がどの程度の放射線を受けているか知るための個人線量計の貸し出しや放射線に関する相談対応も行っています。

—現在どれくらいの量の食品が食品検査所に持ち込まれているのでしょうか。

年間 600 ～ 700 検体ほどの持ち込みがあります。季節ごとに持ち込まれる食品にも違いがあり、春は山菜、夏は夏野菜、秋は柿やゆず等の果物の持ち込みが多いです。最近では、以前よりも持ち込まれる食品の数が増えたと感じていますが、繰り返し来所されている方がいることや、少しずつですが食品検査所のことを知っていただけるようになったことが理由と考えられます。より多くの方に認知していただけるように、今後も周知を続けていきたいと思えます。

—町外からの持ち込みもあるのでしょうか。

原則として町民の方を対象とした施設であるため、町外からの持ち込みはありませんが、稀に町民の方が町外で採れた食品をお持ちになるケースがあります。

—放射線に関する情報や食品検査所で行っていることなどについて、どのように情報発信を行っていますか。

富岡町のホームページからアクセスできる「とみおか放射線情報まとめサイト」にて、町が独自に実施している放射線関連の測定結果に加え、内部被ばく検査や除染等に関する情報を掲載しています。サイト内の情報は月に 2 回更新を行っています。また、定期的に広報誌「ライフとみおか」を発行し、放射線に関する特集や食品検査結果の傾向を紹介する記事のほか、「放射性物質測り隊」というコーナーを設け、雨水や井戸水の放射性セシウム濃度や建物内の放射線量等に関する記事を掲載しています。掲載内容については、町民の方が何を知りたいのか、どのようなことが気になっているのかを探りながら、食品検査所の取組も併せて発信するよう心がけています。

——町民の方の目線になって最新の情報を分かりやすく伝えているのですね。他の課や関係機関等と連携して取り組んでいることはありますか。

生涯学習課に依頼して、富岡町役場に隣接する富岡町文化交流センター「学びの森」で町民向けに実施される集会や勉強会等の中で、放射線に関する講話の時間を設けています。また、ALPS 処理水が海洋放出されるにあたって、今後は生活環境課とも連携を図り、トリチウムに関する勉強会等を開くことも検討しており、関係各課と連携して業務にあたっています。

関係機関では、平成 28 年 9 月に包括連携協定を結んだ長崎大学より、町民の被ばく線量評価や放射線に関するリスクコミュニケーション活動を通して復興を支援していただいています。歩行モニタリングや走行モニタリングによる町内の放射線量測定のほか、解体後の家屋や集会所内のダストサンプリング調査等も行っています。また、原子力安全研究協会の協力のもと、車載型ホールボディ・カウンタによる内部被ばく検査を定期的開催したり、相談員支援センターと連携して町民の方を対象とした車座集会等を行ったりしています。



富岡町食品検査所（外観）

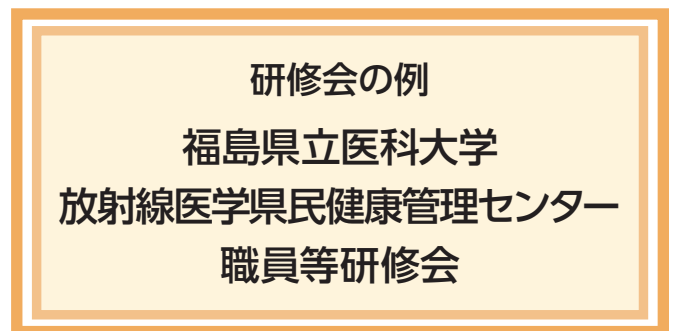
——今後取り組んでいきたいことや意識していきたいと考えていることはありますか。

令和 4 年 1 月 26 日に町内の帰還困難区域のうち、特定復興再生拠点区域（復興拠点）の立ち入り規制が緩和されましたが、将来の避難指示解除を視野に入れて、外部被ばくに関する調査を進めていきたいと考えています。町民の方に個人線量計を身に付けていただき、実際に町内で生活した場合にどの程度の放射線を受けるか調査することを検討しています。また、避難指示解除に向けて、復興拠点内の畑で栽培された農作物等の調査をしていきたいと考えています。

——定期的に情報発信を続けていくことが町民の皆さんの安心にもつながると思います。

今後は若い世代や新たに富岡町に移住して来られた方に周知していくとともに、車座集会を開くなど、放射線に関するリスクコミュニケーション活動を継続していきたいです。

——食品検査所では、食品の検査のみでなく、リスクコミュニケーション活動等、町民に寄り添い幅広く活動されていることが分かりました。本日はありがとうございました。



令和 3 年 12 月 16 日、福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター職員等を対象に、東日本大震災からの復興や福島第一原子力発電所の廃炉に対する取組及び ALPS 処理水について理解を深め、県民からの問い合わせ対応に活かすため、福島第一原子力発電所等を見学し、参加者間で意見を共有する研修会を開催しました。

はじめに令和 3 年 7 月に富岡町にオープンした、とみおかアーカイブ・ミュージアムを訪れました。とみおかアーカイブ・ミュージアムでは、富岡町の成り立ちを伝える地域資料や震災遺産など約 430 点の資料を展示しており、東日本大震災による複合災害がもたらした地域の変化等に関する説明を聞きながら館内を見学しました。



次に同町内にある東京電力廃炉資料館にて、地震と原子力事故に関するシアター上映を見た後、福島第一原子力発電所へ向かいました。福島第一原子力発電所では、廃炉へ向けた取組、ALPS 処理水、作業員の健康管理等について説明を聞きながら構内を見学しました。

福島第一原子力発電所の見学後は、廃炉資料館に戻り、意見交換と質疑応答を行いました。福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センターで電話支援員をしている菅野クニ保健師がファシリテーターを務め、今回の見学で感じたことや考えさせられたことなどを発表しました。例えば、「廃炉まで 30～40 年という期間は住民にとってつらい現実であるが、その中でも変化していくと思うので、実際にどのような作業をしているのか適時発信してほしい」という意見や、「現場を見て、目に焼き付いたことが貴重であった。避難されている方の悲しみが深く入ってきた」といった意見がありました。



会の終了後に行ったアンケートには、「このような研修を県内外問わず多くの人に受けてもらえると良いと思う」との声もあり、実際に自身の目で見ていただくことの意義を感じる研修会となりました。

住民セミナーの例 会津大学短期大学部 放射線教育

令和 4 年 1 月 7 日、会津大学短期大学部食物栄養学科の 2 年生を対象に放射線教育を行いました。受講者の多くが栄養士を目指す学生であるため、放射線の基礎知識と食品中の放射性物質について講義をしてほしいという要望を受け、各専門の講師による講義を行いました。

講義「放射線の基礎知識と健康影響」では、自然科学研究機構の佐瀬卓也先生を講師に迎え、放射線の基礎、放射線の健康影響、福島第一原子力発電所の事故直後から現在までの福島県及び近隣県の空間線量率の変化等について学びました。受講者には県外出身者もあり、佐瀬先生の話に関心深く耳を傾けている様子でした。



次に行われた講義「食品に関するリスクコミュニケーション」では、消費者庁の柿谷康仁先生を講師に迎え、食品中の放射性物質に関することや、食品安全のリスク評価と管理の考え方等について学びました。食品中の放射性物質の基準値の成り立ちや、食品のモニタリング検査に関する説明もあり、日頃から「食」について学んでいる皆さんにとって、大変身近なテーマを取り上げていました。



受講した学生の皆さんは、終始メモを取りながら熱心に話を聞いている姿が見られました。また、講義終了後のアンケートには「県外出身だが、放射線については全く知らず、健康に大きな被害があるものだと思っていた。量によって影響が異なることや、現在の福島県では大きな影響はないと知ることができて良かった。家族にも伝えたい」、「実家が米農家で、販売する予定の米を検査に出していたことを思い出した。身近な問題について詳しく知ることができたので身になった」等の感想がありました。今回の講義が受講者の皆さんのこれからの活躍の一助となれば嬉しく思います。

住民セミナーの例 南相馬市立原町第二中学校 放射線教育

令和4年1月13日、南相馬市立原町第二中学校で放射線教育を行いました。講師に福島県立医科大学の大葉隆先生と原子力安全研究協会の山田孝一先生を迎え、学年ごとに放射線に関する講義と実習を行いました。

1年生は、講義で放射線の単位や種類、半減期や放射線が人体に与える影響、南相馬市の放射線に関する取組について学習しました。実習では、ラディを使って学校の敷地内の空間線量率を測り、測定結果をもとに世界や日本各地の放射線量との比較を行いました。また、授業の後半には、霧箱で放射線の飛跡を観察しました。山田先生から説明を受けながら、興味深く観察している様子が見られました。



2年生と3年生の講義では、放射線の基礎知識や南相馬市の放射線に関する取組に加えて、福島県の時事問題としてテレビや新聞で報道されているALPS処理水について学習しました。

2年生の実習では、GMサーベイメータを使って食塩や校庭の土等、身の回りにあるものの放射線量を測定し、放射線は身近に存在していることを確認しました。生徒の皆さんは、昆布や塩、ポテトチップスなど、日頃口にしている食べ物からも放射線が出ていることに驚いている様子でした。

また、3年生の実習では、GMサーベイメータと測定キットを使って外部被ばくの低減三原則である「時間、距離、遮へい」について学びました。放射性物質

の近くにいる時間を短くすることや、放射性物質から離れること、放射性物質との間にものを置くことで放射線の量が減ることを確認しました。



どの学年の生徒も、先生方の講義にしっかり耳を傾け、積極的に実習に取り組む様子が見られました。各授業の最後に生徒の皆さんが発表してくれた感想の中には「少量でも被ばくと体に害があると思っていたが、今日の学習で問題ないことを知って安心した」、「トリチウムは自然界にもあると分かり、必要以上に怖がらなくても良いことが分かった」等の声がありました。生徒の皆さんにとって、放射線について正しい知識を身につける良い機会となったのではないのでしょうか。



放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより No.30

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町1-6
いわきセンタービル5階、6階

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

